大手前大学論集　第17号（２０１６）65－92頁

異界の中の母なるものへの憧れ（中）

――鏡花にとっての辰口鉱泉の伯母・ちよの娘・ふみ――

松原秀江*

要旨

数え年十歳で、近世の名家・葛野流大鼓師の娘だった母・すゞを失った鏡花にとって、すゞの長兄・孫惣の未亡人・ちよとその娘たち、特にすゞ同様江戸生まれのふみが、代々伝えて今はない鼓の精として、紅葉を師と仰ぐ鏡花の作家としての成長に深くかかわることを、清次とすゞの出会いのきっかけも含め、能とのかかわりの中で述べた。

キーワード：すゞ、卵塔婆の天女、由縁の女、卯辰山と辰口鉱泉、ちよ、ふみ、二人比丘尼色懺悔、松本金太郎、新通夜物語、繼三味線、鼓の精、身延の鶯、歌行燈、芸人

＊大手前大学元教授

四

再度『湯島詣』（明32・11）を見てみよう。神月梓（文学士で子爵の婿だが、鏡花がモデル）は、蝶吉（芸者、桃太郎・すゞがモデル）と「何となくよく似た身の上だ」と思っている。というのも仙台生まれの梓が、「土地の塗物師の子」で、

豊なる家計の下に育ったものではなかったのみならず、

母親は若死し（中略）、やがて父親も亡った

からだけでない。少々長いが、次のように（十九）記されている。

Ⓐ(イ)その母親というのは、その始江戸から住替えて来た有名な芸妓だった、のみならず、(ロ)これを便って同じ仙台の土地へ後から出て来た母の妹夫婦も、また甚だ不遇で、年も措かず夫が亡なったので活計を失うと、女の子が二人あったのが、姉妹揃って苦界に身を沈た。前世の因縁とでもいうのか、(ハ)父の姉の子が一人、梓より年上であったのが、それもまた同じ勤の止むを得ぬ境遇であったから、中の好い従姉妹が三人、年紀の姉なると、妹なると、皆お嬢様ではおらず、女房にもならず、奥様にはもとよりなり、揃って世(ニ)の中から畜生呼わりされる身で。

と。更に又、

Ⓑ梓の実の姉が一人ある。内の都合で、生れると直ぐ音信不通の約束で他へ養女に遣わしたのが、年を経て風の便に聞くと、それも一家流転して、同じく、左褄を取る身になったという。(ホ)野辺の送が済んで、七々四十九日というのに、自ら恥じて、それと知りつつ今まで遂に音信なかった姉者人、その頃一豪商の愛妾になっていたのが尋ねて来て、その小使と、(ヘ)従姉妹三人が竜の腮を探るような思をして工面してくれた若干金とで、ようよう後弔も出来たくらい、梓の家は窮していた。

などと。

鏡花が金沢の彫金師の子で、父・清次の「まさに職人の鏡」ともいうべき、名人気質故に貧しかったことは、よく知られている。[1] 江戸生まれの母・すゞは、葛野流大鼓師・中田豊喜の娘で、

(イ)江戸から住替えて来た有名な芸妓

ではないが、たとえば『日本国語大辞典』（第二版）の芸者の項には、誰もがよく知っている、

舞踊、音曲などで、酒席に興を添えるのを業とする女性。江戸中期頃から江戸で用いられたことばで、（中略）芸妓。女芸者。

といった意味の外に、

①一芸に秀でたもの。芸達者な人。または多芸な人。

②芸能を職業とするもの。能太夫、連歌師、狂言役者、俳諧師、歌舞伎役者、音曲師、曲芸師など。芸人。

などの意味があり、①の「一芸に秀でたもの」の中に、「手腕や能力をもった人」（『日葡辞書』Gueixa の訳）も入るのなら、鏡花（梓）と桃太郎・すゞ（蝶吉）の世界は、もともと一と続きだと云っていい。Ⓐの部分は、

(二)世の中から畜生呼わりされる身で。

と終るが、既に見たように[2]『照葉狂言』（明29・11～12）でも、一座の花形の小親に可愛がられ、

・彼奴等、おい、皆乞食だぜ、踊ってな、謡唄ってな、人に銭よう貰ってる乞食なんだ。

・汝の内ゃ芸妓屋じゃあないか。芸妓も乞食も同一だい。

と蔑まれ苛められる幼い貢（鏡花がモデル）が描かれていた。

従ってその貢も「娼家の児」だが、更に(ロ)の部分を見てみよう。鏡花の母・すゞには、妹が二人あったようだが[3]、『鏡花全集』（岩波書店）別巻「作品解題」で、

本作の政忠は鏡花の母の兄、鏡花からは伯父に當る松本金太郎、篤は松本長であろう。その従兄弟の松吉は鏡花その人、（中略）お組は（中略）金太郎の姪で、金太郎の生家中田家の三女きん（金太郎や鏡花の母鈴の妹）の娘に當る人の薄幸を寫したものか

と云われる『新通夜物語』（大6・4）のお組は、きんではなく長男・孫惣の娘・ふみが、モデルである（きんに娘がいたか否かは不明。『新

通夜物語』については後に詳述）。この部分の「妹夫婦」の「妹」を「兄」にすれば、明治十年（一八七七）すゞの長兄・中田孫惣が亡くなると（享年四十歳）十歳年下のその妻・ちよ（嘉永元年一八四七年生まれ、すゞより六歳年上）は、二人の娘をつれ、金沢から小松へ小松から明治二十三年六月、当時遊泉寺鉱山で銅を産出して、殷賑を極めた辰ノ口鉱泉（温泉）へと移住、そこで芸者置屋を開業している。[4]

『由縁の女』（大８・１）で礼吉（鏡花がモデル）が、伯父（礼吉の母の兄）の死後「竜内」の「温泉宿へ、再縁してからも、[5]それはよく可愛がってくれ」たと語る伯母は、殿田も云うように、[6]このちよがモデルだろう。そこには次のように記されている。

竜内から伯母が用があって、この城下へ出る度には、きっと連れて帰って遊ばしてくれたんですから。（中略）私にとっちゃあ、時々竜宮へ行くような、嬉しい、楽しいものでしたよ。御馳走はある、湯は泳ぐ。……綺麗な姉さんが大勢居て、錺屋の忰が彼家ばかりじゃあ坊ちゃんです。この坊ちゃん、後長じて生意気に夏帽子などを被るようになると、若旦那。―増長したものですな。

（『由縁の女』二十四）

などと。新保が辰ノ口鉱泉を舞台にしたもの、[4]と指摘する『海の鳴る時』（明42・９）にも、

「（中略）辰の口へ行かしやりや、叔母様が又抱いて寝て暖めさつしやるべい。」

「馬鹿をいへ、僕はもう二十だぜ。」

といった会話や、幼い頃の色白で「弱虫」の可愛いその姿形のせいか、

彼は幾歳になつても、私には小兒のやうぢや

と云う叔母の言葉が記されている。『由縁の女』（二十四）によれば、浅野川の、

川上の、その天神橋の上へ行って、せめて月が嬉しさに、―また闇の夜は、岸の草叢、山の裾へ蛍が飛ぶのを、母親の涙と思ふ可懐さに、（中略）立ったり、居たり、歩行いたり、欄干に縋ったり

して仰ぎ見た卯辰山に、父と共に眠る母・すゞを、その母が絵解してくれた草双紙（『釈迦八相倭文庫』）で知っているだけでなく、同じ卯辰山（通妙寺）にも祀られている、摩耶夫人に重ねて憧れた鏡花にとって、「竜宮」にも等しい（『釈迦八相倭文庫』にも奪われた祇園精舎の鐘の代りに、竜宮の鐘が使われている）辰ノ口温泉の叔母は、血のつながりはないといえ、既に亡い母の兄（本家の伯父）の妻、

母上の再来か

と慕い、父・清次の後妻にもと願った（が、清次の死で果せなかった）実妹のきん（お金様と鏡花は云っている）程ではなかったにもせよ、「可懐（なつかし）」く「嬉し」く、生母・すゞに重なる存在だったのだろう。ちよの二人の娘のうち、「二女かねは東廓へ養女に入ったこともある」と新保はいい、[4] 長女・ふみについては不明だが、『新通夜物語』や『卵塔場の天女』（昭2・4）などによると、二人の娘は共に、芸者だったことがあるように思われる。

(ハ)にかかわることといえば、父・清次の姉・ますには、蝋燭商沢田喜助（金沢南町）との間に、明治九年生まれの息子（勇吉）が一人いるが、[6] 鏡花より「年上」で、「苦界」勤めをするような娘は、なかったようだ。

鏡花には姉もないが、Ⓑの「一人ある」「梓の実の姉」には、妹たちが重なっているのではなかろうか。「生まれると直ぐ」（たった二〇日程後で）母・すゞに死なれたやゑが、金沢近郊の森本村の宮崎助次郎に長女としてもらわれ、訪ねて行った上京前の鏡花に、家の横の藪に呼び出されて、

その時始めて、養女であることを知り、又鏡花が兄である事を知った、[6]

のなら、[7] やゑは「音信不通の約束で」、引き取られたのだろう。数え年五歳ですゞに死別した他賀は、わずか十歳（明治十九年三月）で、卯辰高町二番地小竹与助方の養女になっている。この芝居茶屋・本梅は、「余裕のある家」ではなかったらしく、「何かの蹉跌による」のか、[6]「たかを喰いものにしていたのか」、[1] 芸者勤めに出している。吉田昌志の「年譜」[8] 明治三十一年（一八九八）七月の項に、

この月カ、弟斜汀が海路輪島に赴き、当地で芸妓をしていた妹他賀を引き取って、金沢に寄らず帰京、他賀は大塚町の自宅に同居した。

とあるように、八郎兵衛・おてる宛の豊春書翰[1] によれば、他賀にはまだ「一年」程の勤めが残っていたにもかかわらず、「あちこち」の「借金」も払い、「お金」も随分使って、散々世話になった従妹・てる夫婦のいる金沢も避け、豊春は姉の他賀を、鏡花のいる東京につれ帰っている。「陸路」を取らず「海路」によったのは、「費用」や「日数」だけでなく、「余計なめんどう」を避けてのことだった。書翰には次のようにある。

金沢へまゐり候てはもとゐたうちの方から本梅へ電話などかけられ大樋などへむかひにまゐり居り候やうのこと御座候ては余計なめんどうも起き申さんとのうれひ有之

と。この文面から類推すれば、豊春が同じ書翰で、「大変つがうよく」運んだ「今度」のことに比較する「大聖寺の時のやうなめんどう」は、改めて云うまでもなく殿田が、本梅から「芸者」に出された他賀の境遇について、

種々の話を総合すると、その勤め先は山中温泉[9]であったようである。まもなく近くの大聖寺織物商[10]の世話で、この勤めをやめて金沢に出て、二階借の生活を送り、その後も一、二の紆余曲折の後、病気となり、鏡花に引取られ、大塚時代に祖母と共に、同棲していたこともあった

と記している、そのこととかかわるだろう。そしてこの文の点線部分は、

大聖寺の織物商にひかされたらしい[1]

と云い変えることもでき、Ⓑの

㈦一豪商の愛妾になっていた

にかかわってくる。

だが、他賀に「豪商の愛妾」の時期があったとして、「その小使」で鏡花の「家」を助けたとは思えない。既に云われているように、上京後も自らの意志で金沢に戻り、周囲の困惑も省みず高岡に走って、鏡花は他賀に「送金」し続けている[1]。やゑについて云えば、円融寺（菩提寺）に土葬された母・すゞが、卯辰山に改葬された時、「何のためにそれを見に行くのか、わからな」いまま、「養母に連れられ、これに立合」った[6]ことが、㈬の部分にわずかかかわるとしても、

農家で育って、子守をして、工女から北海道へ落ちた

（『卵塔場の天女』四）

お久の境遇が、やゑと大差ないなら、他賀と余り変わらないだろう。後のことだが、やゑが呉服の行商と結婚するのは、明治三十六年（一九〇三）三月（『湯島詣』の書きおろし刊行は、明治三十二年十一月）、その男と共に炭鉱のある岩見沢で、勤め人の家内として暮らして、十八年後に帰ると、鏡花に「時折生活費の不足を訴え、援助を乞うた[6]」というなら、鏡花の二人の妹たちの暮らしぶりは、ほとんど同

じだと云っていい。上京前にやゑに会いに行き、

これから東京へ出て、偉いもんになるつもりだ。そうしてお前をつれに来る。辛かろうが待っとってくれ

と、その「小さな手に、二銭銅貨三十枚を握ら」せ、泣き別れた[6]鏡花が、たとえ作品の中でも、

親類附合は大嫌いだ。　（『卵塔場の天女』三）

というのは、あるいは偽りのない鏡花の一面の本心だったろうか。

にもかかわらず『湯島詣』に、Ⓑのような部分のあるのは何故だろう。何の根拠もない単なる創り事だったとは思えない。そしてそれは勿論、(ト)の部分に深くかかわってくるだろう。

五

吉田昌志の「年譜[8]」によれば、鏡花が近代小説に出会うのは、明治二十年（一八八七）十五歳（満年齢で十四歳）の折である。十五歳で元服したように、この時期が人間にとって、子供が大人に脱皮する最も重要な時期だということを、先ず押さえておこう。第四高等中学校の受験を志しながら、「遊戯中」の「大怪我」で断念[11]、失意の母のない鏡太郎（鏡花）は、子供なら当時誰もが夢中だった馬琴[12]の『近世説美少年録』の外に、明治十八年『小説神髄』を出して、人間の内面を描くことを近代小説の第一条件とした、坪内逍遙の『妹と背かゞみ』『此処やかしこ』など読んでいる。そして明治二十二年、改造社版「年譜[11]」には、次のように記していることに、改めて注目してみよう。

①四月、友人の下宿にて、はじめて紅葉先生の、「いろ懺悔」を讀む。庭には桃櫻咲き、憐に織の梭（はた）（をさ）の音、鼓の調子に似て聞えたり。と。また、その数か月後のこととして、

②あまたの小説を耽讀せり。大低、貸本。見料は、辰口鑛泉に住ひつゝ、母なきわれをいとをしみし、叔母の小遣と、其の娘の小分の化粧料なり。

とも。

まだ子供ながら、一人立ちの年令に達していた鏡花・鏡太郎が、「友人の下宿」で、生涯師と仰ぐ紅葉その人の作品の中でも、「もつともロマンチックな」[13]『二人比丘尼色懺悔』に出会うのは、誠に興味深い。出会うべくして出会ったとでも、云ったらよいだろうか。庭に咲く「桃櫻」は、雪の降りしきるどんより曇った北国の空に、春（それは青春につながる）を告げる花であるとともに、「桃」は後に宿命的に出会う桃太郎・すゞの「桃」でもあるが、やはり何と云っても、温く柔らかな母・すゞの胸。それは絵双紙（錦絵）の山姥（綺麗な姉さん）に抱かれたやんちゃな金太郎の世界にも重なるようだ。そして下を向いて咲く「櫻」はしばしば、幼な子をその胸に抱いて、静かにほゝえむ母親の笑顔にたとえられる。桃や桜の淡い紅色も、人を癒し、本来の居場所に居るような、安らぎを与えてくれるだろう。「憐」の「織の梭の音」が「鼓の調子に似て聞えた」のも、思いも寄らず出会ったこの新しい小説[14]の世界が、裁縫などしていた母・すゞにせがんで、絵解などしてもらった幼い頃の草双紙の世界[15]につながり、妹・やゑの子供にまで、「謡が大好きや」「血筋は争われぬもんじゃ」（『卵塔場の天女』四）などと記さずにはいられない鏡花には、この出会いがまるで夢幻のように、「幽遠」な夢幻能の世界に重なって、江戸生まれの大鼓師の娘・すゞのあの世からの贈り物のように、思えたからではなかろうか。春陽堂版「泉鏡花年譜」[16]には、

③記憶忘れ難し

と記している。だからこそ、①の文章が数行おいて、②の文章へと続いてゆくのだろう。

だが、すゞの実の兄・孫惣を亡くした千代が、二人の娘をつれ小松から辰口へ移転したのが、明治二十三年六月のことだとすれば、[4]②の「見料」以下「辰口鑛泉」の「叔母」や「其の娘」に関する部分が、明二十二年のこととして記されるのは、鏡花の記憶違いということになる。『新編 泉 鏡花集』の「年譜」にはない。だが、事実（現実）を超えて、後の（年譜作成の頃の）鏡花の意識、即ち心の中では、卯辰山に眠る母・すゞに対する思い（①）と、その母のように自らを、「幾歳（いくつ）になつても」「小児（こども）のやう」に「いとをし」んでくれた、辰の口温泉の母の兄の妻・ちよへの思い（②）は、鼓を媒介に離れがたくつながっていたのだろう。②のない春陽堂版「泉鏡花年譜」でも、③のすぐ後に、『新編 泉 鏡花集』の「年譜」では、明治二十三年のことに正されている部分が、次のように記されている。即ち、

夏、辰の口温泉、叔母の家にて手にしたる一枚の讀賣新聞に、紅葉先生の「夏痩」一枚を見出す。次第に、小説創作の念強くなり、「八文字」とか題する試作をなす。引つゞき二三の作を試む。

紅葉先生に手紙を出したれど返事に接せず。

と。『夏痩』の一枚から、紅葉を「崇慕渇仰」し、その「門生たらむ」と志したのも、「辰口鑛泉」の「叔母」、中田ちよの「家」であり、更に又上京して、「都會の廣大」なのに「驚き」、「氣おくれして了っ」て、紅葉宅を訪れる「勇氣」も「挫か」れ、

巷に迷ひ、下宿を追はれ、半歳に居を移すこと十三次。

と「年譜」（改造社）に記す、その余りの「困窮」にたまりかね、頼りにしたのも、「伯母・従姉の住む辰口の家」だった。

もっとも、口が「裂け」ても云える「義理」ではないが、「最ウ一度、五圓ばかり」と、この「五圓」を最初に訴えた相手は、父親の清次だが、その明治二十三年二月（年月推定、二十四年ではないのか）、十三日の書簡には、

辰の口の叔母とも御相談なし被下度、私より直に頼やり候もいかゞ故、跡より手紙可差上候、

などと記している。二度目の後妻を迎え、他賀を養女に出していた頃の清次は、かつて精一杯世話した、妻・すゞの実家[2]の長男の妻・ちよに、助けられることがあったのかもしれない。そして又、「温泉宿を一人で切廻す、勝気な」（『由縁の女』二五）ちよも、その恩に答え、一つの家を束ねる長男の妻（嫁）としての自覚からもか、すゞの妹・きんからは「あね様」と慕われ、孫惣十七回忌法要のためのそのきんの旅費について、

辰口の叔母さんの御骨折一方ならず御配慮もなか〳〵と存じ候

と鏡花も記している（明治二十六年五月清次宛書簡）ように、女の細腕ながら、出来る限り最大限の援助をしていたのだろう。明治二十四年十月（年月推定）二十五日の清次宛鏡花書簡には、

此間辰口より金五圓拝借仕候。

とある。

この「金五圓」が、所々誤りもあると云われる、春陽堂版『鏡花全集』巻一の「泉鏡花年譜」などに、

郷里の従姉にねだり、五圓の小爲替券一枚を送らる。従姉の珊瑚の簪を賣りたるなり。

と記すその「従姉の珊瑚の簪」の代金だったのなら、それは既に見た②の「辰口」の「叔母」の、「娘」の「化粧料」に対応するだろう。それだけでない。

『由縁の女』（大８・１）の主人公・麻川礼吉は、鏡花自身がモデルだが、その中で先ず、母・すゞの埋葬された向山が、開発されて一時殷賑を極め、「喜見城」や「竜宮」にたとえられたことがあると、[17]云っていることに、注目してみよう。その「向山」の

墓に咲いた、菫の花を余りゆかしくって、摘んで来て、この中に入れて置いた

母の形見の「金唐革花模様の手函」（菫と共に今も遺っている）[18]を「覗くと」、「いい匂」に誘われて、「浦島とは反対（うらはら）で」、

・一時に、十四五も若くなるような心持がいつもします。

・仏壇と違って、ここの母は、島田髷に結って、手打の簪を挿しているような気がして、腕白な弟野郎が、綺麗な姉さんに逢うようです。

などと云っている。つまり若いまま亡くなった母・すゞは、鏡花の心の中では、いつまでも「綺麗な姉さん」として生き続けていたのだ。とすればその母の姿は、叔母のちよによりも、[19]従姉妹のその娘に重なり、それは66ページⒷの「梓の実の姉」にもつながるだろう。「野辺の送」や「七々四十九日」「後弔」などの言葉にもつながる、『新通夜物語』（大６・４）を、見てみよう。

この作品は、「かけがへの無い」「叔父さんのお通夜の晩」に集まった、従姉弟たちの話で成り立っている。その叔父さん・上杉政忠のモデルは、すゞの亡くなった兄・孫惣の弟で、政光とも称した宝生流シテ方の松本金太郎（政忠も政光もともに、「十四歳からの養子」である）、政忠の子供のお常はたね、篤（あつし）は長（ながし）、その妻・お悦はふみ、そして又お組とお米はちよの娘のふみとかね、萱原（かやはら）松吉は鏡花自身、その妻・お光は桃太郎・すゞが、夫々モデルである。ちよが、

故郷（くに）（城下）に居る叔母さん

として語られるのも、「泉鏡花年譜」などに記された、

郷里の従姉にねだり

の「郷里」同様、『由縁の女』（二十四）で礼吉（鏡花がモデル）が、

東京へ行ってからも、竜内（辰ノ口がモデル）は忘れられません。

と云っていることと（無意識の世界で）深くかかわるだろう。

『新通夜物語』では、松吉とお米の会話を通して、通夜の席にはいないお組と、松吉の幼い頃の姿が語られてゆく。それは微妙に、母親を亡くして寄る辺ない幼い鏡花・鏡太郎の、憧れと現実を浮かび上がらせるだろう。たとえばお米が、

姉はね、松さんの母さんには、そんなに似ては居ないさうだよ。

と云えば、松吉が、

何でも肖たやうに見えるんです。

と答えているように。

ふみは明治元年、かねは明治四年、そして鏡花は明治六年生まれだから、すゞの亡くなった明治十五年、「可愛い兒だった」年下の十歳ほどの鏡太郎を、男の子より少しおしゃまな女の子である十五歳のふみや、十二歳のかねが、母性本能の成長する過程で、この作品のお組とお米のように、「抱いて寢」ることがあったかもしれない。通夜の晩、お常（政忠の娘）とお光（松吉の妻）が「抱合」い、「すやすや」「寢て居る」姿を見て、松吉がお米に、

血統は通はないでも、他人ぢやないと思へばこそだ。お組さんは何うして居るだろう。……

と尋ねる場面のあるのも、そんな思い出が、二重写しになっているからだろうか。

しかもそれだけでない。松吉が生まれた家の二階の「三疊と次の六疊」は、お組やお米、松吉の祖父母（母・すゞの両親がモデル）が、「老後を送つて鼓の稽古をした處」だった。お常（モデルのたねは文久元年生まれ）は、従妹のお組の妹のお米に、次のように云っている。

お前さんの姉さんは、東京で生れたんでね、乳呑兒を抱いて、叔母さん（お米の母）が叔父さん（お米の父）や、松さんの其の二階に居なすつたと云ふ、御兩親、私には祖父母さ、其人たちと連立つて、貴國へ行つたんだからね。まあ、餘計馴染さね、（中略）

一體、お組さんは、お前さんよりか、眞個の江戸うまれだからね。

などと。すゞが江戸から金沢へ下ったのは明治元年、両親の他に乳呑児を抱えた兄夫婦が一緒だった。[6] 明治三年には平民になった両親（鏡花の祖父母）が、清次宅の二階に同居していたと云われるが、[6] 兄夫婦（孫惣・ちよ）がつれて来た「乳呑児」がふみ（お組のモデル）、従って『笈摺草子』（明31・4）によれば、「江戸の生（うまれ）でない上総のもの」だったその母親・ちよ[6]とも、妹のかねとも違い、ふみは「眞個（ほんと）の江戸うまれ」で、すゞに最も近いと云っていい。そのお組は松吉の母を、

大事な若い小母（をば）さん

と云い、結婚した「二十そこそこの頃」のお組は、松吉にとって、

若い叔母さんくらゐ

に「思はれ」、「其の頃」「和、英、數學の私立へ通つ」ていた松吉（「年譜」の十五歳の頃に同じ。この頃馬琴の『近世説美少年録』や逍遙の『妹と背かゞみ』『此処やかしこ』など読んでいること、既に述べた）が、「友だちの許（とこ）へ」寄り路し、「日暮方」（他そ彼時）「家へ戻ると」、お祖母さんに、

二階へ行つて見さつしやい、お雛様を飾つたが大きな雛ぢやぞ。

と云われ「梯子段を駈上つて」「襖を開ける」と、

炬燵にのつけて、草双紙を讀んで居たのがお組姉さん。……忘れもしない、北雪美談時代鑑[20]と云ふんですね。

と松吉は云い、又その

表紙の繪が抜け出したのかと思つた……

とも云っている。この部分は礼吉が、「綺麗な姉さん」のように思い、『笈摺草子』（十三）には、

紫色（後述）の着物を着て錦絵のやうなお嬢様

として描かれる母・すゞの姿に限りなく近いだろう。「お雛様」も「草双紙」も、鏡花の「母の記念（かたみ）」の品である。それだけでない。「十一から二くらいだつた」頃、松吉をまるで「小兒（こども）の氣」で、「祭禮（まつり）の中を、手を曳（ひ）いて飴（あめ）を買つてくれた」り、「見世物を見せて」、「お小遣をくれた」りして、「小屋の前」で「二人で立つて居た」時の、その「島田髷に結つた後姿」は、「母（おつか）さんのやうに見えた」と云い、

「暗い家」の中では、

　潑と咲いた薄紅梅で、急に母さんが蘇生つたやうでもあるし、新しく眞個の姉が出來た氣がする、

とも云っている。とすればそんなお組のモデルのふみが、十五六七の鏡花の「貸本」の「見料」を、わずかばかりの「化粧料」の中から、出してくれることがあったかもしれない（後に詳述）。

　だが、

　眞個の姉妹に成らうねえ。

とまで云ってくれた「お組姉さん」が、「可懷い」と松吉が繰り返すのは、「かけがへの無い」「叔父さんのお通夜の晩」に、そのお組がいないからでもある。「七ツか八ツ」で「家」が「退轉」（孫惣が亡くなるのは明治十年、その時お組のモデルのふみは十歳）、芸者に出ていて、龍野の温泉の鍛冶屋の近蔵と、二十歳そこそこで「夫婦に成つて」、「いざこざが絶え」ず、別れたつもりで逃げて来て、「義理の叔父」の松吉の父が、「確と預つた」にもかかわらず、「山賊」のように暴れ込んで「引摺り」戻され、お組はどこにも出られない体になっている。そして「鼓の家」だった父方の「かけがへの無い」「お叔父さん」（宝生流シテ方の松本金太郎がモデル）の通夜の晩、そのお棺の蓋を開けると、松吉と篤（金太郎の子・長がモデル）は、「ふつと霞のやうな、氣の立つ中に」、「美しい婦人」の姿を見たように思い、確め合ううちに、「屏風の前に」又一人、人が居るように思われて、お米と松吉が、

「あれえ、姉さん。」

「お組さん。」

と、思わず声を上げると、

　幻の鼓を抱いた、白い手は、袖ながら弗と炬燵に消えた。

と記されている。そして更に、

　お組が急病、危篤だと、横濱から、中繼ぎして、お米へ宛てた「電報」が舞い込んで、この物語は終っている。

「金を笠に被た、百姓」の近蔵が、「勾引め、密夫め」と暴れ込んで、「大切な姪」を預った松吉の「父の胸倉」を「締め」上げ、「祖母さんを、突倒した」そんな修羅場を目の当りにして、お組が、

叔父さん、死んでお詫びを、

と悲鳴を上げている事を見れば、66ページⒷの㋭はあるいは、これに似た体験に基くのかもしれない。そして又そんなことがあった為に、ふみは清次の前に出られなくなり、中田ちよ母娘の記事が　孫惣十七回忌（明治二十六年）以後、年表にもほとんど見えなくなるのだろうか（明治三十七年金沢の東新地江戸屋で、ちよを招き遊んだことを、懐む葉書が残ってはいる）。

それはそれとしてお組の抱いていた「幻の鼓」とかかわり、この作品には鏡花の伝記を考える上で、思いも寄らない事が明らかになっている。「叔母さん」（ちよがモデル）が「昔のお役者夥伴」だからと、その「鼓」を「渡したらしい」お静という女性についてである。少し長いが松吉（鏡花がモデル）の言葉として次のように記されている。（　）内はモデルを示した。注になっていることもある。

親類ぢや無い。が、此のお静小母さん、と云ふのは、矢張舊幕瓦解の騒ぎに、江戸から故郷へ流浪したお役者夥伴の娘で、其れは笛の家だつてね。此の人は年紀は些と上だつたけれど、娘同士、私の母（すゞ）の仲よしで、此が一時、故郷の私の家の二階に同居して居た事がある。其の親たちと一所に。可いかい。

お米さん（かね）の祖父母（中田豊喜とその妻）、父親（孫惣）、その妹の私の母（すゞ）などは、その頃は餘所の人さね。ト友達だから、一寸一寸お静さんの許へ、御免なさい、とか何とか云つて、二階へ遊びに來たもんです。……或時、……藤の花の活かつた床柱に凭掛つて、文金に銀の平打で、田舎源氏を讀んで居たとも知らないで、用があつて、下屋から、つか〳〵と上つた私の父（清次）――と云ふ譯だとさ。母（すゞ）が亡く成つてから晩酌にのろけたぜ、怪しからん父（清次）だね。

と。○点をつけた部分など、鏡花特有の文飾なのか、あるいは又、『笈摺草紙』（『能楽』第十巻第一号に再録のとき『紫道中』と改題。母・すゞの面影を伝える主人公の名が紫）や『由縁の女』（大８・１　母・すゞの面影に重なる憧れの女性・お楊は、『侠紫田舎源氏』の藤の方によく似ている）などの創作起点につながる事実なのか、鏡花の「作品の生まれる書斎」に、摩耶夫人像の厨子や小観音像、師の紅葉、母すゞの遺品などとともに、草双紙を収めた書棚は勿論、『侠紫田舎源氏』の口絵（表紙とも）を貼り交ぜた屏風[18]のあることを思えば、清次とすゞの出

会いの場に、鏡花の旧蔵草双紙目録にも記されて遺る、『田舎源氏』[20]があったというのは、鏡花作品について考える上でも、なか〳〵捨てがたいことのようだが、右の文は又、柳田泉が「鏡花伝き、がき」[13]の「父母のこと」の項で、清次とすゞの出会いについて述べ、（　）をつけて、

それが何をしてゐたものか、何といふ名であつたか、といふことも、今日ではもう探るすべもない

と記しているすゞの「仲のよい友だち」[21]の素性を、具体的に語っているように思われる。加賀藩の細工者（細工人）の中には、「本芸のほか、能の大鼓・小鼓・太鼓・笛・地謡・脇」など、「兼芸として習わせられ」る者が多く、「加賀の能楽の普及発達に大きく貢献した」[22]のであれば、すゞの「友だち」が「笛の家」で、細工職人の清次の「家の二階に」、「親たち」と共に「同居していた」としても、不思議ではないだろう。そして「其お静さんと云ふ呼名が母（すゞ）の聲に似て居たから」、「可懐い人だった」とあることから類推すれば、その名前も「静」だったのかもしれない。この文章は更に、次のように続いている。

が、最う其の時（お組が「近藏の所へ行かない」「まだ藝妓」の頃で、松吉と共に、お静の荒れ果てた「鳥の巣のやう」な蕎麦屋を訪ねた時）は、世に亡い人に成つて居た。

が、此の人の内に、父さん（孫惣）が、祖父さん（中田豊喜、ふみ及び鏡花の祖父）から譲られた鼓がある、とお組さん（ふみ）が其の時言つた。

持手（豊喜と孫惣）は二人とも亡く成つて、譲る人はなし、お組さんも七ツか八ツ、お米さん（かね）も嬰兒なり、家（鼓の家である中田家）は退轉、昔のお役者夥伴（笛の家）だと云ふので、叔母さん（ちよ）が望まれて渡したらしい。……

と。

何故か、鼓が頻に戀しい。……有るものやら無いものやら、それは分らないけれど、もしまた、此の蕎麦屋に傳はつて相談の出來るほどのお金子なら、何うにかして取戻したい、他に何にもない、親たちの記念だから

と、お組は「染々」と云い、

お能の方で、家に貽つた品は一品でも、其の内に此家の叔父さん（亡くなって通夜の行われている上杉政忠、モデルは松本金太郎）の方

へ上げたい

と、母親（ちよがモデル）の云うのを聞いていたから、お組はまるで、鏡花が「永眠するまで」「枕頭の書として親しんだ」『雨月物語』[23]の「菊花の約」の赤穴宗右衛門のように、義兄弟の丈部左門との約束の日に、

魂よく一日千里をも行く

の言葉通り、「みづから刄に伏」「陰風に乗」って、やって来た赤穴宗右衛のように、その大事な「かけがへの無い叔父さん」の通夜の晩、「急病」になり「危篤」状態に陥って、電報が着いたその時、「幻の鼓を抱いた白い手」を見せて「弗と」、松吉とお米の前に現われたのである。お米は実の妹だが、お組は松吉に、

眞個の姉妹に成らうねえ。

と云っていたのであり、松吉も又、「新しく眞個の姉が出來た」ように思っていたことは、既に見た。

もっともふみは、新保の論考[4]によれば、明治二十三年辰口へ移転したちよが開業した置屋の、「つい目と鼻の先の同町内、伊藤某方へ嫁いでいる」。伊藤家の子孫の「証言」（新保論文の発表は、昭和四十九年八月）によれば、「先々代の頃には置屋を営業していた」というから、『新通夜物語』でお組の夫が「鍛冶屋」（「陶器の素地を拵へる」「お職人」）というのは、虚構の可能性が高い。だが、鏡花が、その「面影」に似てくることを喜び、「叔父貴」「叔父貴ッ」と云って敬愛した松本金太郎[24]がモデルの亡くなった叔父が、粋で通なものわかりのよい江戸ッ子として描かれていることを思えば、「維新の騒動」で一気に生活の基盤を失ってしまった、「相傳名誉の鼓の家」の出である母・すゞは勿論、貧しいながらもその一族を支えて愛し、名人気質の細工職人として生きる父・清次を誇にして、もし「生まれ變らせると云つたら」と聞かれ、「諾、おなじ父母なら」と答えた（趣味 明41・9）鏡花にとって、「龍野の温泉」（当時「殷賑を極めた」と云われる辰口鉱泉がモデル）の「田舎の金持」の、上見ぬ「鷲」のような不遜な振舞が、人の情も知らない「鬼」か「山賊」のように、「傲慢無法」な気の「荒い」「鍛冶屋」風情に、思われたのかもしれない。

新保は、「ふみは大正五年（松本金太郎が亡くなるのは大正三年、『新つや物語』の発表は大正四年、大正六年に『新通夜物語』になった）、四十代の半ばで夫と離婚した」といい、その理由を、次のように記している。

当時の辰口では浄瑠璃がさかんだったとみえ、（中略）ふみの家の裏の座敷に浄瑠璃の師匠が逗留して、妓達に稽古をつけていた。その師匠の身の廻り、食事など一切の世話を引受けていたふみと、その師匠とがひそかに姿を消したのは、その年の地蔵盆も終り秋風のたつ頃だった。

と。のみならず、次のようにも記している。

抱えの妓たちの着物から帯まで、一切預けて知り合いから大金を借りだして逃げたふみの不始末に、この土地に居辛くなったのか、ちよはその年も押しつまった十二月、住み慣れた辰ノ口を出て横浜へ去った。

かねが安島某と結婚して八月、横浜へ移っていたからだろう。ふみが金沢で編笠を冠って流しの三味線を引いているのを見たという者もあり、東京へ行ったと云う者もあった。

と。『新通夜物語』で、横浜に引越すまでのお米の母親の、「びしよびしよの土間に、ぐづ〳〵の井戸側」、「水は灰汁のやうで泡が立つ。蛞蝓は這つてるし、戸外は塵埃だらけの大川」などという「二階借家」でのひどい暮しは、「永年」「夫婦なか」の「悪かつた」ふみが、「家を駈出して」「行方が知れなく成つた」（『繼三味線』大7・1）後の肩身の狭いちよの、「この土地に居辛くなった」姿を、（少し大げさにではあるが）伝えるものだったろうか。

とすれば、鏡花のふみへの思いは、裏切られた、鏡花は全く思い違いをしていた、ということになる。だが、果してそうだろうか。鏡花は『繼三味線』で、「萬三郎（すゞの祖父・豊喜の父）」は「大鼓」では「近世の名家だつた」（三）と記し、「山深い雪の谷に埋もれた」としても、「少い、花やかな時の」「母（すゞ）も叔母（ちよ）も、従姉たち（ふみ・かね）も皆」、その「鼓」の「銘」を名にする、「繪から抜出た」ような柳橋の著名な芸者・谺同様、「代々其の祖父さんまで持傳へた」「鼓の精」（七）として描いているからである。

六

村松が、

主人公慶吉に貢ぐ旅芸人の女お沢は明らかにふみをモデルにしている

と指摘する[25]『身延の鶯』（大11・1～3）を見てみよう。「私は先生でも大人でもない、米を買つて食う稼人だ」と云い、自らをモデルにした小説『除蟲菊』の中で、

偏に、紅葉先生が戀しかつた。

と記す、「雷に蒼く成つて震へるほど」の「臆病作者」、志摩慶吉は鏡花がモデル、そして、

・い、年をして、藝妓もした癖に、色氣を今知つたやうに、旅廻りの淨瑠璃屋だか、でろれん語だか、わけの分らない十年も年下の若藏と駈落をして、駈落もい、けれども、不義をしたんだから、他國へ遁げたつて、門附も出來やしない。

・くだらない身の上話の中へ持つて行つて、私の姉の事が書いてあるぢやあないの。

と妹のお安が云い、慶吉も又、

「お、、お澤さん、姉さん……」

と私は思はず、故郷の從姉の名を言つた。（中略）……此の時の金子も、また違つた意味で、お澤さんが貢いでくれたもののやうにさへ思ふ。其の從姉は、葦原煎餅と稱ふる、溫泉土產を賣る商人へ緣着いて居たのである。が、近頃旅藝人とか、行商人とか言ふ流れ渡りの旅の男と駈落したと風のたよりに聞いて居た。……（以上―除蟲菊。）

と記すお澤は、鏡花の從姉のふみがモデルだろう。慶吉もお澤も（お安も）共に、故郷は「三國（越前）」、親たちの一家の「出は東京」になっている。又、

年紀下の其の野郎は、――いまは落魄れたけれども、もと姉がお世話に成った、お主の若旦那で、それを貢ぐために、姉が苦勞す

るんだと……しみたれた風體で居るもんだから、世間體は忠義ゆゑと云ふ事にして、横濱の家に置いたんですがね、

と、お安が云っていることから類推すれば、お安のモデルはかね、又ふみが辰口で、「身の廻り、食事など一切の世話を引受けていた」と云われる「浄瑠璃の師匠」は、あるいはふみが芸者だった頃の、「お主の若旦那」か、それに近い者だったのかもしれない。そしてその頃、気の弱い（と『新通夜物語』にも『身延の鶯』にも記される）ふみは、「竜の腮を探るような思をして」（『湯島詣』Ⓑの㋒）、幼い鏡太郎に、わずかばかりの金を「工面してくれ」ていたのだろうか。

「寒い」北国の「霙の降る晩」、「暖いものも食べられない貧乏人の息子」だった慶吉が、「小遣」も「友達もない」ままに、「心細がつて」、「いとこの私達」に「訪寄」ってくる、

服装は悪し、しよびたれてるし、それだから陰氣だし、私は餘り嬉しくなかつた。氣も合ない。

というお安が、「蘆原の溫泉に藝妓をして居た」「姉とは、それは〳〵氣が合つて、仲よしだつた」と云い、更にお澤は、

柄を見て、縫直しものの一枚も着せて遣れば、少しは小遣も持たせるし、二人とも小説が好きでね、山家の溫泉場の貸本で間に合はないものは、姉が工面して慶ちやんのに買つて遣つたんです。珊瑚の簪の一本ぐらゐは抜いた事もあるでせうよ。

と云っていることに、注目してみよう。ふみもお澤同様「小説が好きで」、慶吉（鏡花）やお澤と同じ様に、「紅葉先生」を「神様のやうに思つて居」たのなら、鏡太郎が辰口鉱泉の伯母・ちよの家で見出した、『夏痩』（紅葉作）の載った『読売新聞』は、ふみの持物の中にでも紛れ込んでいたのだろうか、あるいはふみが鏡太郎の為に持ち込んだのだろうか。「珊瑚の簪」は、抱主が芸妓用に誂えたものの中から「一本ぐらいは」と抜き取ったというより、春陽堂版『鏡花全集』の「泉鏡花年譜」によれば、ふみのものだったと思われる。とすればこの「郷里の従姉」の「珊瑚の簪」は、父・清次が母・すゞの為に作り、草双紙の好きなすゞも鏡花も、後生大事にした「手打の簪」[26]に、深くかかわるだろう（『新通夜物語』に語られるすゞと清次の初めての出会いの場でも、すゞの姿を「文金に銀の手打で」と記している）。すゞが縫物の手をやすめ、うるさくねだる鏡太郎に、草双紙の絵解をした、そんな思い出を語る「いろ扱ひ」には、『新通夜物語』でふみがモデルのお組が、炬燵で読んでいた『時代かゞみ（北雪美談時代鑑）』[20]の名もあるように、従姉のお澤が、紅葉の「名著の一篇、三人妻の一章を正しく朗らかに読む」のを聞いて、慶吉はその「みすぼらしい旅の女」は、それを「諳誦」することができると思って

いる。とすれば、愛読する『紅葉集』を持ち歩く「従姉」の「旅」の姿は、草双紙の入った「雛の箱」と共に、江戸から金沢へ落ちてきたすゞの姿に、重なるだろう。

作家たらんと上京しながら、広大な東京の賑いにたじろぎ、紅葉に会うどころでなく、ただ漫然と

一箇年間。巷に迷ひ、下宿を追はれ、

半年に「十三四」回も「居を移」して（改造社版「年譜」）、母・すゞの名を「念じ」、「狂氣から救われる」（『星あかり』）こともあった鏡花・鏡太郎が、その挙句の果てに頼りにしたのも、「伯母・従姉の住む辰口の家」だった（『新編泉鏡花集』「年譜」）。もっともその間の「借財」は「あまりに」多く、「従姉」が「珊瑚の簪を賣り」、送ってくれた「五圓の小爲替劵一枚」も、結局破り捨てる（春陽堂版「泉鏡花年譜」）しかなかったのだが、しかし、この従姉の厚意は、鏡花の作家としての心・魂を、支え続けたと思われる。『身延の鶯』を見てみよう。

先ずここで、「小説」など世間では「風俗壊亂」くらいに思われ、

坊さんは木の端、竹の折なら、人には鉋屑か、蛙の干もののやうに言はるゝ作者

と記されていることに注目しておこう。従って金銭に敏感なお安が、「日本の琵琶界」の「女性の明星」・山端築野としてすり寄り、荷担してしまっている強雲居士のような男が、社長兼発行人である「歌舞之菩薩」の如きいかがわしい雑誌になると、「一番輕少」な「御筆代」どころか、「初めから薄謝」さへ「仕拂ふつもりはな」く、志摩慶吉は、

・相當には遣つとるやうです

・雑誌の呼びものに利用するぐらゐな事はあるんぢやよ。仕事をさせる時だけは、間違つても先生扱ぢやね。

などと云われながら、

内々は活字に成るのを喜ぶんだ、構はず遣了へ、

と、次のように「遣了」われてしまっている。

忙しくつて、暑くつて、苦しい處を、退引の成らない、檀那寺の和尚の紹介のために、辛うじて一編を草して、身分相當の良心ゆゑに、署名を恥ぢて何某分に拘束した（堅く約束した）のを見事に裏切られた（目次の小説の題名の下に名前が出ていた）ばかりか、

少くとも一石の米は買へる筈を、女髪結の祝儀ほどに蹴込まれた（稿料はほとんど十分の一だった）上、紙代は償ふから刷直せと言ふ條件さへ、唯兩三日發行の日が後れると言ふ理由のもとに拒絶されて、剩へ其生命とまでは行かないでも、手足の指ぐらゐには思ひさうな編中の章句の（最後の次頁にはみでた）十何行をスパッと切つて落されたのである。

それでは「餘り」に「勝手」だ、断固として「御掲載を斷つて見せませう」と云うと、その怪しげな雑誌・歌舞之菩薩社の編集主任（熊澤常雄）に、「志を立てて苦學のために上京し」た、昼間は「雑誌のために働き、夜分」は「夜學に通ひ」、それが今の自分の「生命」なのに、社を追われたら、「食ふ」にも「寢る」にも困る、「青竹に縋つて故郷へ歸らねばならぬか」と思うと、

其の故郷の父兄、親類……何よりも友人等に、今更合はす面もありません次第で。

などと泣き付かれてしまう。口からの出まかせだとしても、その言い訳の中身はまさに、慶吉のモデルである鏡花の泣き所だったろう。共に飢えて苦しんだ済生学舎の医学生達のように、幕府瓦解後四民平等をうたう当時の東京には特に、大志を抱き立身出世を夢みて故郷を出ながら、巷をさ迷うしかない者が多かったのだろうか。「見す〳〵」溺れる者を、黙って「見て居られ」ない、「御社の御都合になすつて宜しい」、

私は卑怯ものですから、御免下さい。

と、慶吉は身を翻してしまうのである。

だが人を哀れんで、「沸湯を」「飲され」、作家として最も大事なプライド（魂）も捨ててしまった「臆病」者の慶吉は、「自棄酒を呷つた勢に乗じて」「泳ぎ出」た銀座の待合で、「懇意な友だち」の「銀行家」に出合い、「上品な年増の姐さん」と酒の勢いで、「身延詣」をすることになる。そしてそこで不思議な体験をするのである。その夜本山の麓の旅館の蚊帳の中から山へ出て、「寢られないから……」と「歩行いて」いるうちに、「嘗て湘南の海岸に、病を養つて」いた頃経験した「妙な」「記憶」に誘われ、「何となく涙ぐましくもあれば、又慰められも」する、「神とも、鬼とも、分らない。微かな、遙かな聲」、「神のやうで、人のやうで、魔のやうで、冥土を呼びながら行く幽靈かと可恐ければ、生れぬ前の世の唄のやうでたよりない」、「まだ逢はぬ戀人があるやうで」、「可懐く、床しく、寂しく、心細く、また戀しい」。その「不思議な現象」が、「故郷の、遠い、薄青い蘆原の温泉の湯女の唄の響」きにつながり、

……何處でか、遙に、何處でか、幽に、可懷い從姉のお澤が、渠を呼ぶやうに、身に沁みて、胸がうづいて、慶吉は現実のお澤に出会うのである。この「妙な」体験は、かつて幼い鏡花・鏡太郎が、桃太郎・すゞに出会うべくして体験した、「幼い頃の記憶」によく似ているだろう。(2)

霧に包まれた月に照らされ、「大白象にも似る」「古び破れた一張の天幕の下に、紅葉先生の名著の一篇、三人妻の一章を正しく朗かに讀む」、お澤がいたのである。そしてそのそばには、『紅葉集』を手にした手巾売・お澤の「怪しげな情夫」の外に、「歌舞之菩薩の記者」がいた。「志摩子」（慶吉）が「餘りに氣の毒」で、良心の「苛責を感じ」、身延までその雑誌社の社長にお伺いに来て、「商機が大事」なだけの、その余りの身勝手な卑しさに憤り、「東京へ歸るのも」やめにして、「天幕でも擔」いで、お澤と「一所に放浪」するつもりでいる。従って一部始終を既に知っているお澤の厳しい言葉が、この作品の最後を締め括ってゆく。「激しい世間に苦勞」し、自らの境遇に引きずられて、作家としての意志を貫けない慶吉に、お澤は次のように云っている。

・何故……貴方は、慶ちやん、そんなに氣が弱いんですえ。（中略）其の人が、もしか、自分の言ふ事を貴方が肯いてくれないと、（すぐに雑誌社を追出されて、身が立ち行かなくなる、せつかく學問をしに出て來た東京にもゐられなくなる。）と言はれた時に、何故判然と（自分の仕事にはかへられない）と言つて、ちやんと撥ねつけないのです。

・……もしその上にも、命にかゝはる、死ぬと言はれたら何うするんですえ。婦だつたら何とします。あなたのやうだと、嫌な男に、――言ふ事を肯いてくれなければ死ぬ、――と言つて口說かれた時、斷りやうがないぢやありませんか。私は可厭だ、斷ります。（中略）嫌な奴には、御隨意にお死になさいと然う言ひます。……それとも貴方、慶ちやんは、どんな婦でも、死ぬ、と言へば、靡くと思つて居なさいますか。

・姦通をして遁げたんだつて、對手も私も生命がけですよ。貴方は立派なお仕事をして居ながら、人間一人の生命なんか、何に遠慮をするんです。(チ)一派一藝の遊藝の師匠だつて、弟子が不埒を働けば、たとひ其の爲に身が立たなくつて死んだつて、勘當もする、破門もします。斬つて棄てると同一です。

と。そして又、「申譯がありません」と頭を下げ、

自信がないからで、決して怠つては居りません。……一生懸命には行つて居ますが、我身を庇ふために、小説の作のために、人が社を追れると云ふのさへ、半分は嘘と知つても突離す事が出來ません、まして、生命にかゝはるなんぞ。――いや、しかし未熟だからです、修行が足りないのです。

と云えば、即座に、

修行をなさいよ。

と言い放っている。

このお澤の言葉を聞いて、慶吉が

母の、母の言葉とも思ひます。

と応えているのは、右の文の㈦の部分とも深くかかわり、加賀藩御手役者・葛野流大鼓師・中田萬三郎を祖父に持つ母・すゞの生き方が、――「舞歌二道」と云われるように、「舞に高められ抽象化された演劇と、謡と囃子による音楽的要素の融合」である能の世界で、「それぞれがシテと一対一で渡り合う重要な」囃方[27]の中でも、「大鼓はお囃子の元締」（『繼三味線』四）と云われたその大鼓では、「近世の名家」と称えられた中田萬三郎を祖父にするすゞのプライドに支えられたものではなかったかと、思われてくる。鏡花は、「我儘が過ぎて」「破門された」「寶生流の若手」の「才人」・瀬尾要をヒントに[28]、恩地喜多八には瀬尾要の外に松本長・木村安吉を、恩地源三郎には宝生九郎・松本金太郎を夫々複合して[29]、芸の未熟さを突き、按摩を憤死させた喜多八が、師匠の叔父に勘当され、門付芸人におちぶれて死を覚悟し、流浪の果てに許される名作、『歌行燈』（明43・1）を残している。それだけでない。『由縁の女』（三十四）には、幼い礼吉（五才、鏡花がモデル）の身替に、子守に来ていて馬に蹴られて死んだ、「たった一人の孫娘」（十七才）のかわりに、その子が、

どんなに可愛い顔をしているか、一生の思い出に見たい

と、「魔界」と云われる白菊谷から迎えが来た時、恐れをなした幼い礼吉が、その娘が「錦絵」とともに、「うつつに憑きもののしたように」「こがれ」た「姉様人形」を、形代にしようとした「その時」と、次のように記している。

熟と私を視た、母の、気高いまで屹とした顔を忘れません。――また身代を立てるのか、人を損ってまで、我身、我生命を大事が

るものではありません、――ともの言わぬ唇が、神仏の声のごとく、きりりと胸に響いたんです。

と。そしてその言葉を聞いて、

小児はまたワッと泣出した。……

とも。「二十七や八で若死」したのだから、すゞは、「身も心も弱かった」に違いない。にもかかわらず、江戸生まれの女らしく、「先祖」を忘れずものごとの本質を見抜き、「短刀をさし、刀を懐に入れて居」[30]るかのように、「がんこな時は覚悟のある人」だった。従ってその優しくもりんとした姿は、

寂しく美しく、この世の人のようでない。端正で、清優で、守本尊が抜出したと思う頼母しさ

で、幼い者の心に刻まれ、生涯の「守本尊」にもなったのだろう。そしてそれは又、江戸生まれの母方の従姉・ふみにも見られたのだと思われる。

のみならず、「この世の人のようでない」に注目すれば、『歌行燈』（十三）で喜多八が、

殺されても死んでも、人の玩弄物にされるな

と云った言葉を「生命がけで守って」、喜多八の「嫁」になったお三重に重なる喜多八の「阿母」は、すゞがモデルだったのではなかろうか。とすればすゞにはまだ「振袖の年頃」に、「些とばかりの貸を枷に」、按摩に「妾」にとねらわれ、お澤のように、「可厭」は「可厭」、「隅田川へ落チヨウとした」ことがあったのかもしれない。[31]『新通夜物語』（二十一）で、お米（従姉のかねがモデル）は次のように云っている。即ち、

生命がけでなくつちや、……無事に納つた處は、藝事ぢやない。それは、世間のあたり前、唯世帯を持つて活きて居るんでせう。誰でも、藝事は身に備つて、爲ようと思へば出來るんだけれども、世間で許さない事が多いから、身體が危くつて出來ないんです。

叔父さん（亡くなって、通夜のお棺の中にいる上杉政忠、すゞの兄・松本金太郎がモデル）のやうな藝人は、舞臺へ立つて、其の出來ない藝事を、私たち素人のために、丁として見せて下さるんぢやありませんか。

と。更に又『繼三味線』で、「母から叔母の手、従姉妹たちの手に傳へた」、「純商賣人の使ふ」「お祖父さん」（中田萬三郎）の形見の鼓を、

「金子のために人手に渡」さなければならなくなった（十）時、廉三郎（洋画家だが鏡花がモデル）は半之助（宝生名取りの能役者・松本長がモデル）に次のように云っている（五）。

（値打のわからない）千兩の客が現に爰にあるとしても、（上手の手の）三百兩へ渡したい。情人に身を任すんだ。旦那を止して。……些と當世でないかもしれないが、昔の遊女、藝者の意氣だよ。われ〳〵藝人の一族だ。

と。清次とすゞが貧しいながら、お互がお互の「情人」（色）だったことは既に見た。[2] これらの部分を整理すれば、

三百兩――情人――命がけ　――藝事――藝人

千　兩――旦那――あたり前――世間――素人

と対になっている。お米の言葉通り、

婦が一生懸命に成つた時は、皆立派なお役者だわ。

と云うのであれば、「命がけ」だったすゞも、お澤もお組も、従ってそのモデルのふみも、「皆立派なお役者」、「藝事」「藝人」の世界の住人であり、「風俗壊亂」の謗りも受ける作家の慶吉や、そのモデルである鏡花の世界に、最も近い存在だと云えるだろう。そして鏡花が鬼神力や観音力を信じ、神かくしや生まれぬ先の世などに深い関心を示す作家であることを思えば、それらは世俗を超えた「修行」[32]によって、見えるか見えないか、感じるか感じないかということだけでのことで、「現実世界はそのまま、異世界につながっている」ように思われてくる。そのように考えるなら、『身延の鶯』で、いささかいかがわしい元雑誌記者と「旅の小商人」と共に、慶吉に見送られて旅立つお澤を、「八戒悟淨に守護」された「渡天竺の順禮の風情」にたとえるのは、まことに興味深い。慶吉とお澤の前途を祝福するかのように、

身延の空にありあけの月、明星が唄つたやうに、鶯の聲が響いたのである。

とこの作品は終っている。

――この稿続く――

〈注〉

（1）新保千代子も、「新資料紹介―妹たか女をめぐる書簡考と自筆年譜訂正―」（鏡花研究三号）で、

蒲生氏（蒲生欣一郎『もうひとりの泉鏡花』東美産業企画）はくり返し泉家は貧しくはなかったと力説されているが、松永、室野の実に記憶の良い老姉妹によると、彼女たちが母（目細てる）から聞いた寝物語から推して、以前はともかく鏡花の少年時代の泉家の貧しさは疑う余地のないものだったようだ。

と記している。（　）内注記及び傍点は筆者。以下同じ。もっとも小林輝冶は「加賀象眼の職人たち―鏡花の諸作を一つの視点として」（『金沢学④ ホワットイズ・金沢』前田印刷出版部）の中で、「代々美術工芸に意を用い御細工所」を「藩にもった加賀では」、「殿様から扶持」など貰って、「暇など構わずいいものさへ作」ればいいといった「昔」の意識が、明治・大正・昭和になっても残り、「職人の内証は誰もが想像以上に苦しかった」と述べている。既に知られているように、清次は加賀藩御用白銀細工職人・水野源六の弟子、工名は政光。

（2）松原秀江「異界の中の母なるものへの憧れ―鏡花にとっての桃太郎・すゞ―（上）」（大手前大学論集第16号）

（3）既に発表済の（2）で、すゞを一人娘の末っ子としたのは誤り。すゞには二人の妹があり、二女は名前も不明だが、三女はきん。一旦嫁ぎながら、余り幸せではなかったらしい。

（4）新保千代子「鏡花新出書簡考―上京時をめぐる年譜への疑問―」（鏡花研究創刊号）

（5）新保は（4）で、辰口村ホ拾五番地甲に、ちよを戸籍筆頭人とする中田家の戸籍が存在する旨、伝えている。

（6）殿田良作「泉鏡花の實際と作品」（國語國文第三二巻第七號）

（7）殿田が（6）で指摘した『卵塔場の天女』でも、やゑがモデルと思われるお久が、次のように云っている。

十ウの時、はじめて両親はあかの他人じゃ、赤子の時に村へ貰われて来た、と聞かされた時ほど、悲しかった事はなかったぞね。

と。

（8）『新編泉鏡花集』別巻二（岩波書店）

（9）『日本国語大辞典』（小学館）の「山中温泉」の項には、次のように記している。

石川県江波郡山中町にある温泉。大聖寺川の渓流に沿う景勝地にある。加賀温泉郷の一つ。

（10）『国史大辞典』（吉川弘文館）の「大聖寺」の項には、次のようにある。

十八世紀中ごろから絹織物が隆盛となり、幕末は約三万疋を生産。明治になって農村の養蚕・製糸業と相まって発展し、大正十五年（一九二六）工場数九九、力織機二八二五、産出量六七万疋であった。

（11）鏡花年譜の「起源」と云われる現代日本文学全集第十四編『泉鏡花集』（改造社）「年譜」

（12）一葉は、『枕草子』や『源氏物語』『伊勢物語』などの平安文学や、西鶴作品の影響が強いと云われるが、幼い頃は何も見ず暗誦することができる程、『八犬伝』を読み込んでいたと云われる。鏡花の作品にも、『八犬伝』の登場人物の名が散見する。鷗外は弟の篤次郎と共に、馬琴の後刷本をほとんどそろえていたらしい。逍遙の『小説神髄』が出るまで、馬琴の後刷本は相当数出まわっていたと云われる。

(13) 柳田泉「鏡花伝き、がき」(『柳田泉文学遺産』第三巻　右文書院)上京のこと

(14) 大正十四年四月の「新潮合評會第二十三回(文壇思ひ出話)」(『鏡花全集』別巻　岩波書店)の中に、次のような箇所がある。

田山　私なんか紅葉さんの『色懺悔』といふものが出た時分には何でせうか、新しい小説に啓けたやうな氣がしたもんですよね。

泉　その以前に、新しい小説に吾々が初めて接したのは、矢っ張り皆んなが讀んだのは『經國美談』『雪中梅』などでせうね。是はまあ學生が、今のやうに好き嫌ひなしに揃つて讀んだやうですね。

と。田山は田山花袋、泉は泉鏡花。

(15) 鏡花は「紅葉先生」(明星卯歳第十一号　明治三十六年十一月)の中で、次のように云っている。

私の先生にお目にかゝりたいと云ふ考を始めて起しましたのは『色懺悔』を見てからです。これは田舎で読みました。(中略)どうして、こんなに佳く出来たらう(中略)まるで、種彦京伝の文章を読むと同一で、果して東京にそんな方がおいでなすつて、お書きなさるんだか何だか分からなかつたのです。

と。当時草双紙と絵双紙はほとんど同義語で、その中には種彦・京伝のものは勿論、平仮名で書かれた挿絵のついた本(草子)のほとんどが入り、西鶴本や膝栗毛も同様だった。また、熊や鹿などにたわぶれ、怪童ぶりを発揮し、江戸時代子供たちのアイドルだった金太郎と、やさしい母親の表情を浮かべる山姥の版画を多く遺す歌麿に、「針仕事に余念のない」女達と、「そのかたわらで戯れ遊ぶ」子供たちを描いた三枚続がある。

(16) 『鏡花全集』巻一所収(岩波書店刊の『鏡花全集』別巻にも〔参考資料〕として掲載)

(17) 『角川日本地名大辞典』17　石川県の「うたつやまこうえん　卯辰山公園〈金沢市〉」の項には、

江戸期には金沢城を見下ろす位置にあるために町人の登山は禁じられていたが、幕末の慶応3年から14代藩主前田慶寧(よしやす)が卯辰山の開発を進め、藩営の養生所などが設けられ、また市民の遊興の場として芝居小屋や茶屋なども建てられた。しかし、廃藩とともに山上は寂れたが、明治43年に市有公園となり、大正3年に開園。

とある。

(18) 第28回慶應義塾図書館貴重書展示会『鏡花の書斎―「幻想」の生まれる場所―』にも、その写真を見ることができる。

(19) すゞの兄の妻であるちよが「伯母」でなく「叔母」と記されるのも、若くして亡くなったすゞを意識してのことかもしれない。

(20) この草双紙は、(18)に同様で、その冊子に収められている「泉鏡花旧蔵草双紙目録」(慶應義塾大学三田メディアセンター)にも、記載されている。

(21) (2)の〈注〉(10)に記しておいた。

(22) 梶井幸代・密田良二『金沢の能楽』(北国出版社)加賀藩の細工所と細工人の兼芸

(23) 鏡花は、

李長吉の詩を愛誦し、(中略)永眠するまで「膝栗毛」や「雨月物語」と共に枕頭の書として親しんだ。

と云われている(岩波書店刊『鏡花全集』別巻「作品解題」巻十〔四〕春書後刻)。『湯島詣』(四十一)にも、神月梓(鏡花がモデル)が、

『雨月物語』を読んでいる場面がある。

(24) 松本たかし「薫風茶話　鏡花さんの藝談」（『鏡花全集』巻二十八　月報28　岩波書店）　『卵塔婆の天女』の主人公・橘八郎が、「鏡花の化身である」と同時に「能役者」であるのも、同じ理由からだろう。

(25) 村松定孝「鏡花研究新資料に関するノート」（文学昭和五一年七月号）

(26) （18）には次のようにもある。

鏡花は春陽堂版『鏡花全集』15巻にこの簪の写真を載せ、「父が刻みし手打の簪、牡丹一枚、ゆかしき人のさしけるが、いまわがもとにあり。」と記した。清次はこの牡丹をかたどった簪をすずのために作り、贈ったのだろう。

と。清次にとってすゞは、「牡丹」のように美しくしとやかで、いとおしい存在だったのだろう。

(27) 『日本大百科全書』18（小学館）

(28) 村松定孝「作品解題」（『鏡花全集』別巻　岩波書店）

(29) 『新編泉鏡花集』第七巻解説（岩波書店）

(30) 「草双紙に現れたる江戸の女の性格〔談話〕」

(31) 執筆予定の本稿に続く（下）に詳述。

(32) 『繼三味線』では、廉三郎（洋画家）と半之助（宝生名取りの能役者）の「従兄弟同士」が、同様の意味で「勉強しよう」と云い合っている。鏡花が紅葉に原稿をさし出して、初めて呼び出された時の言葉も「勉強は大切だ、怠るな」の一言だった（「子守役から筆を執るまで」）。明治時代、学生は「修業中」とも云われた。